

帝政期ミセヌム・ラウエンナ艦隊と属州艦隊の差異について

筆者は研究動向として軍事史学五四巻二号において¹、帝政期ローマ海軍の組織構造を検証したジャスパー・オータイズ (Jasper Oorthyus) の記事と、帝政期ローマ海軍の一兵士のキャリアを考察したマイケル・テイラー (Michael Taylor) の記事を訳した。しかしそこでは紙幅の都合上、イタリアのミセヌム・ラウエンナ艦隊 (以下ミ・ラ艦隊) とその他の属州艦隊の差異について言及することが出来ず、双方ともに同質のものであるという印象を与えてしまったかもしれない。しかしながら、両者にはその規模や構成員の地位などにおいて少なからず差異があるとされており、これに関する検証を補足として掲載したい。

具体的にはオータイズの記事に関連してミ・ラ艦隊と属州艦隊の規模や組織面での差異、テイラーの記事には艦隊兵士全般の出身地域と民族構成を検証することとなる。また、本稿には掲載できなかった図版もここに掲載する。

一、ミ・ラ艦隊と属州艦隊の組織面での相違

大まかに言って、イタリアの両艦隊と属州艦隊の組織面には二つ、不確実なものを含めれば三つの大きな差異があった。一つ目がその規模、二つ目が艦隊長官の格、そして明確な結論は未だ出ていないが三つ目が兵士の法的地位である。

(一)、艦隊規模について

まず一つ目の差異である艦隊の規模、つまり人員や艦艇の数については、直接的に言及する文献はほとんど存在しない。イタリアの両艦隊については皆無で、属州艦隊についても管見の限りでは二例しか存在しない。

ミ・ラ艦隊については、直接的言及はなくとも間接的な証拠からその規模を類推することは可能である。その重要な証拠となるのがネロ期末期にミセヌム艦隊の人員を母体として創設された第I軍団アディウトリクス *Legio I Adiutrix* である。この時期の一個軍団の定員は五、二四〇名であり²、この引き抜きに際してミセヌム艦隊が数千名の人員を一挙に失ったことは間違いない。しかし同艦隊は人員の補充をした形跡が無いにも関わらず、この直後の四皇帝の年の内戦の際にオト帝の指示でガリア南岸部のウィテリウス派に対して大規模な作戦行動を行っており³、同艦隊がもともと一個軍団を大きく上回る数の人員を擁していたことを示唆している。

無論、人員補充の形跡が無いというのは単にタキトゥスが言及しなっただけという可能性はあるが、これ以外にもイタリアの両艦隊の規模についてはもう一つの論拠がある。それが両艦隊の艦船数である。ミセヌム艦隊に関しては碑文史料から約九〇隻の艦船名が、ラウエンナ艦隊のほうでは約四〇隻が知られている⁴。両艦隊とも艦船の大多数は三段櫂船と二段～一段櫂船であるリブルナ艦だったが⁵、平均的な乗員数が一〇〇名だとすればミセヌム艦隊の人員は九、〇〇〇人、ラウエンナ艦隊は四、〇〇〇人になる。これに軍港に配置された船大工などの地上勤務の人員を加えれば、ミセヌム艦隊が一万強の人員を擁していたという推測は成り立つように思える。ただし、これらの艦船名は単一の史料にあるものではなく、後一～三世紀の碑文史料に見える艦船

名を合算したものである点については留意する必要があるだろう。しかしながら、イタリアの両艦隊が元首政期を通じて大幅に戦力を増強したという史料は存在せず、またそうした理由も考えられないことから、上述の論拠から概算ではあるがミセヌム艦隊が通常約一〇〇隻の艦艇と人員一万人、ラウエンナ艦隊が約五〇隻の艦艇と人員五、〇〇〇人を擁していたとする計算が成り立つ。

属州艦隊の規模については前述したように文献史料において二例の言及がある。一例目がヨセフスのユダヤ戦記における、ネロ期のポントス艦隊が「三、〇〇〇人の重装歩兵と四〇隻の艦艇」で黒海南岸部を哨戒しているという言及だが⁶、これについてはその文脈で語られる黒海南岸で略奪行為を働いていたとされるコーカサス地方の海賊の記述が、過去の複数の史料を繋ぎ合わせて作られた極めて時代錯誤的なものであり、これを鵜呑みにすることは出来ないとする指摘が近年エヴェレット・ウィーラー (Everette Wheeler) によってなされている⁷。第二例はタキトゥスの『同時代史』の記述であり、後述する後六九年のバタウィア人反乱の鎮圧に出動したゲルマニア艦隊の二四隻の艦艇が言及されているが⁸、これらの艦艇の艦種は擢船である以外は言及されておらず、またこれが同艦隊の総戦力を指しているのかも曖昧である。

(二)、ミ・ラ艦隊と属州艦隊の格

いずれの例においても、その戦力はミセヌム艦隊はもちろんラウエンナ艦隊よりも少数である。この二例を全ての属州艦隊に当てはめるのは乱暴であるが、これ以外にも推論を立てる材料は存在する。それは騎士階級の昇進コースにおける、属州艦隊の艦隊長官の位置である。ジョリト・ヴィンティエズ (Jorit Wintjes) によれば属州艦隊長官もミセヌム艦隊長官も、騎士階級の官職であることは同様だったが、碑文史料から属州艦隊長官の年間給与は六万セステルティウス級だったことが判明している。これは一〇〇〇人規模の補助軍騎兵大隊長官と同額に過ぎない。一方で、ミセヌム艦隊長官の給与は二〇万セステルティウス級とその三倍以上だった。昇進の順番で言っても、属州艦隊長官は騎士階級軍人のキャリアにおいて、その初期に任命されるものに過ぎなかったが、一方でミ・ラ艦隊長官は騎士階級の昇進コースにおいてかなり後に位置していた。ラウエンナ艦隊長官の序列はミセヌム艦隊長官のすぐ下に位置していたが、そのミセヌム艦隊長官は騎士階級のキャリアの最上位である親衛隊長官に近い位置にあった。こういった給与と序列の面で見ても、属州艦隊がイタリアの両艦隊と同規模だったことはありえない⁹。

これらの点から見ると、タキトゥスが言及したゲルマニア艦隊の二四隻の艦艇が同艦隊の総戦力であったとしてもおかしくはないと思われる。同様にヨセフスが述べたポントス艦隊の四〇隻の艦艇という数字も、その数値が本当に正確であるかどうかは別としても有り得ない規模ではない。なおイタリアの両艦隊においては上述したように三段擢船以上の艦艇が散見されるが、現存史料において言及される属州艦隊の艦艇はほぼ全てが二段擢船以下であり、その他はごく少数の三段擢船が見られるのみで四段擢船以上は確認されていない。属州艦隊そのものに関する史料が少ないという事を留意する必要はあるが、属州艦隊に配備されていた艦艇はほぼ全てが二段擢船以下だったと考えられる。そうだとすればゲルマニア艦隊の人員数は陸上配置の兵士を考慮しても二〇〇〇人程度だった筈である。属州艦隊の規模に関してはこれ以上の考察は難しいが、属州艦隊長官の格を考えてもどの艦隊でもミセヌム艦隊の五分之一である二〇～三〇隻の二段擢船

以下の艦艇と二〇〇〇人程の人員を擁していたとするのが妥当だと思われる。少なくとも、ミ・ラ艦隊よりは小規模だった筈である。

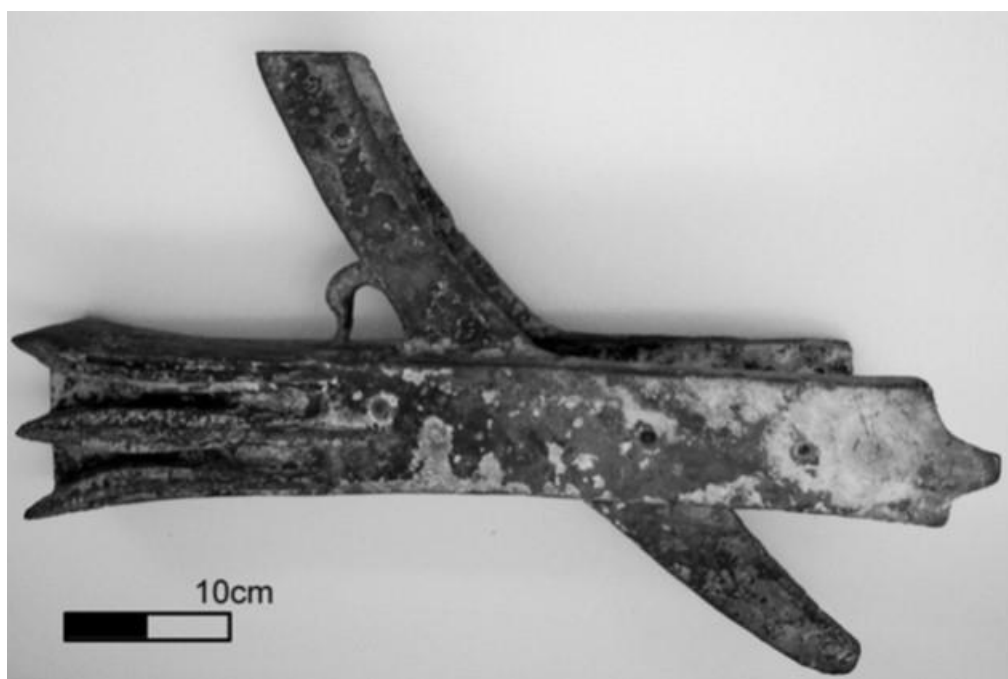


図 1 これは 1964 年にリビアのワッディ・ベルガメル沖で発見された、ベルガメルの衝角 Belgammel Ram と呼ばれるヘレニズム期末期～ローマ期初期の衝角。これはプロエムボリン Proembolion と呼ばれる、喫水線上に設置された副衝角である。そのサイズから、二段櫓船のものだと推測されている。副衝角は喫水線下の主衝角が敵船に衝突したさいに、船首部分を保護する役目があった。先端が三叉になっているのは、古典期ギリシア以来の伝統的な形状であるが帝政期に入ると徐々に細く鋭い鉤爪型の衝角が主流となっていった。Jonathan R. Adams et al., "The Belgammel Ram, a Hellenistic-Roman Bronze Proembolion Found off the Coast of Libya: test analysis of function, date and metallurgy, with a digital reference archive," *The International Journal of Nautical Archaeology* 42-1 (2013), Fig. 2b より



図 2 三段櫂船が描かれた帝政期初期のレリーフ。ポッツォーリ出土。発見場所からして、恐らくはミセヌム艦隊の三段櫂船を描いていると考えられている。様式化されてはいるが三段になった櫂が確認できる。ここで見られる甲板両舷に張り出しを設けそこに最上段の櫂を設置する設計は古典期ギリシア以来のもの。この構造では漕手は船内に収容され見えないはずなので甲板上の人間は接舷戦闘用の海兵か、美術的理由から漕手をあえて描写しているものと思われる。Raffaele D'Amato, *Imperial Roman Warships 27 BC–193 AD (New Vanguard)* (Oxford: Osprey Publishing, 2016), p. 8 より。



図 3 トライアヌス帝の戦勝記念柱に描かれた二段櫂船と三段櫂船。上段と下段が二段櫂船、中段がより大型の三段櫂船となっており、三段櫂船の左端にいる人物がトライアヌス帝だとされている。漕手が甲板上に上半身を晒していることと、衝角がベルガメルの衝角のような伝統的なものと変わり先端の鋭い鋭角なものになっているのはリブルナ艦の特徴である。図像を柱内に収めるためか船体に比して人間が極めて大きく描かれている点には注意すべきだろう。Raffaele Raffaele D'Amato, *Imperial Roman Warships* p. 19 より



図 4 重装歩兵を満載した二段櫂船が描かれたポンペイ出土のフレスコ画。ポンペイからは軍艦を描いたフレスコ画が複数発見されておりレリーフからは伺いしれない船体の塗装色などについての貴重な史料となっている。左の艦は大破し沈没しかけているが右の艦からの攻撃によるものか。右側は珍しく艦を船尾から描いており、船尾に設置された二つの舵と漕手がリブルナ艦と違い艦内に収納され姿が見えない点に注目。ナポリ国立考古学博物館所蔵。筆者撮影。



図 5 反航通過する二隻の多段櫂船を描いたポンペイ出土のフレスコ画。櫂の段数は判別が難しいが、三段あるようにも見える。両隻とも甲板上に重装歩兵を並べている。ナポリ国立考古学博物館所蔵。筆者撮影。



図 6 同じく、ポンペイ出土の海戦を描いたフレスコ画。両隻とも船首に描かれた魔除けの眼がはっきりと確認できる。ナポリ国立考古学所蔵。筆者撮影。



図 7 係留中の多段櫂船を描いたポンペイ出土のフレスコ画。左の艦は中央の柱から伸びる栈橋のようなものに繋がれている。係留中のためか櫂が取り外されており、張り出し部分にある三段の櫂の差込口が確認できる。両隻とも甲板が屋根に覆われていることは興味深い。この構造では接舷攻撃は不可能だったはずである。絵師のミスだろうか？ナポリ国立考古学博物館所蔵。筆者撮影。



図 8 戦闘中の多段櫂船を描いたレリーフ。オスティア・アンティカより。前一世紀後半~後一世紀初頭にかけてオスティアの有力者だったカエティリウス・ポプリコラ **Caetilius Poplicola** の顕彰碑文の一部。櫂の根本が甲板の張り出しに隠されて見えない図三と違い、こちらは張り出しの外板が切断されているためか根本がはっきりと見える。これが異なる設計を意味するのか、あるいは彫刻師のミスなのかは定かではない。碑文自体には軍艦に関連する言及はなく、カエティリウスとこの図像の関係は明確ではないが、恐らくはカエティリウスが若年時にローマ内戦に水兵として従軍したことを示しているのではないかとされている。筆者撮影。

(三)、ミ・ラ艦隊兵士と属州艦隊兵士の法的地位における差異

第三点である市民権の有無についてはまず議論を整理する必要がある。この論点についてはおおまかに二つに分けられる。一つ目が元首政期初期におけるミ・ラ艦隊における奴隷兵士の存在の有無であり、そして二つ目がフラウィウス朝期以降のミ・ラ艦隊兵士への入隊時の市民権授与である。

まず第一の論点である奴隷兵士の存在について述べたい。一般的には古代の軍艦においては奴隷が漕手として使役されたというイメージが存在するが、史料上このような事実を明確に確認できる事例は極めて稀である。ローマ史における例外としては第二次三頭政治中の内戦において、オクタウィアヌスが漕手として二万人の奴隷を動員した例などがあるが¹⁰、この場合も奴隷は徴兵と同時に解放されている。しかしながら、ユリウス=クラウディウス朝時代には解放奴隷がミ・ラ艦隊において従軍していたということには明確な証拠があり、ネロ帝の元家庭教師だったアニ

ケトゥス Anicetus のように艦隊長官ですら解放奴隷が努めていた例がある¹¹。

この事実は、テオドール・モムゼン (Theodor Mommsen) から初期の研究者に着目され、ユリウス＝クラウディウス朝時代のミ・ラ艦隊は主に皇帝家の奴隷と解放奴隷によって構成されていたという議論を促した。特にモムゼンはアウグストゥス～ティベリウス帝期の幾つかの碑文史料からイタリア両艦隊の複数の高官が奴隷であったと解釈し、ユリウス＝クラウディウス朝時代のミ・ラ艦隊は主に奴隷によって構成された皇帝の私有物兼私兵であり、フラウィウス朝時代に属州民に、ハドリアヌス帝期にローマ市民が主体となったという一種の段階的発展論を提唱した。モムゼン説は彼自身の権威もあり長らく通説となる。しかしこの説は二〇世紀半ばに史料の見直しを行ったチェスター・スター (Chester G. Starr)、ディートマー・キーナスト (Dietmar Kienast)、シルヴィオ・パンチェーラ (Silvio Panciera) らによって強い反論がなされている。彼らは古代世界における奴隷の軍事使用に対する強い忌避感を取り上げ、緊急時の措置以外で恒常的に奴隷が兵士として従軍することは有り得ないとし、したがって海軍が皇帝家の私有物であったとする見解も成り立たないとした。更にモムゼン説の根拠である奴隷の艦隊高官の存在も、碑文の読みそのものに間違いがあるとして、挙げられている例は全て解放奴隷ないしは属州民であるとされた¹²。

こうした反論は受け入れられ、現在ではユリウス＝クラウディウス朝期のローマ海軍に奴隷は従軍しておらず、大多数を占めた属州民と少数のローマ市民や解放奴隷で構成されていたというのが現在の通説である。

しかしながら、イタリアの両艦隊の高位ポストに解放奴隷が就任していたのも確かであり、解放奴隷が完全に閉め出されていた軍団や補助軍と比較すると明らかに異質である。このため、ユリウス＝クラウディウス朝時代の海軍の性格については今現在も議論が続いている。いずれにせよ、この状況はフラウィウス朝期に入ると大きく変化した。解放奴隷は艦隊から排除され、艦隊長官などの役職も騎士階級が独占することとなった。フラウィウス朝期からは、ローマ海軍において解放奴隷の存在は確認されなくなったのである。

そしてもう一つの変化がフラウィウス朝期以後のミ・ラ艦隊の入隊者を対象とした入隊時の市民権授与である。これについては直接言及する文献は存在しないが、同艦隊へ発給された退役証書がこれを示唆しているのである。

フラウィウス朝期以前のミ・ラ艦隊の退役証書には、補助軍の退役証書と同じく対象となる兵士の属州民名、つまり個人名・父称・出身地が記されている。これが七〇年代初頭に変化しローマ市民権保有者が用いる三つの氏名であるトリア・ノミナ、つまりプラエノメン (個人名)・ノメン (氏族名)・コグノメン (家名) が記されるようになった¹³。これは補助軍や属州艦隊の退役証書と比較すると大きな違いであり、また属州民のトリア・ノミナの使用がクラウディウス帝期に違法となったことを考えると¹⁴、明らかに公的な文書である退役証書においてトリア・ノミナが用いられていたことは、ミ・ラ艦隊の兵士が入隊と同時にラテン市民権などのなんらかの限定的な市民権を取得していたことを示していると考えられた。例えばジョン・マン (John Mann) はミセヌム艦隊に入隊したエジプト人兵士アピオンが、ミセヌムに到着した直後に父に向けて執筆した手紙において¹⁵自身の新しい名前がアントニウス・マクシムスであると伝えてるのはこのことを意味していると指摘している。なぜイタリアの両艦隊においてのみこのような措置がなされた

か、はっきりとした理由は不明であるが、おそらくは両艦隊が「四皇帝の年」の内乱においてウェスパシアヌス側についてしたことへの報奨として親衛隊と同じプラエトリア (Praetoria) の称号を与えられたことと関係があるとされる¹⁶。

これが事実だとすれば、属州艦隊においては二六年の従軍後に授与される筈の市民権を、ミ・ラ艦隊においては入隊と同時に入手できたことになり、両者には明確な差が存在する。

しかしながら、この説の根拠となるのはフラウィウス朝期以降のミ・ラ艦隊兵士の退役証書のトリア・ノミナのみであるため、これが本当に市民権授与を意味するのかどうかは現在でも見解が別れている。近年の例では、退役証書のトリア・ノミナに関して上述したマンやジュリアン・ベネット (Julian Bennett) は入隊時の市民権授与を肯定しているが¹⁷、ロイド・ホプキンス (Lloyd Hopkins) はこの慣例を艦隊の行政的慣習の変化に起因させており市民権授与を否定している¹⁸。しかしホプキンスもこの変化の具体的な原因については結論を出せていない。ミシェル・レッデ (Michel Reddé) は史料の不足を理由に結論は出せないとしている¹⁹。

私見ではフラウィウス朝期以降のミ・ラ艦隊の退役証書の氏名が例外なくトリア・ノミナとなっており、更に属州艦隊や補助軍において同じ現象が見られないことは決して軽視できることではないと考える。ローマ軍に属州民が入隊する理由の一つが市民権の獲得ならば、それを限定的とはいえ入隊と同時に獲得できるミ・ラ艦隊は入隊希望者にとって魅力的に写ったはずである。そして入隊時の市民権授与という特典があった以上、ミ・ラ艦隊への入隊には一定の基準が存在したことも仮定できる。入隊希望者がどのような基準で選抜されたのか、あるいはミ・ラ艦隊への入隊を拒否された者がその代替として属州艦隊に配属されるような制度があったのかどうかは不明ではあるが、兵卒レベルにおいてもミ・ラ艦隊が属州艦隊よりも格上の存在に見られていた可能性はあるだろう。

二、 ミセヌム・ラウエンナ艦隊と属州艦隊の出身地域・民族構成

ここでは、第二点であるミ・ラ艦隊と属州艦隊における兵士の民族構成と出身地域の差異について検証したい。テイラーの記事で扱われていたクラウディウス・テレンティアヌス (Claudius Terentianus) はエジプト出身であり地元のアレクサンドリア艦隊に所属していたが、多くの艦隊兵士が出身地から遠く離れた地域に配属されていたことは碑文史料などが示唆している。

しかし艦隊兵士の出身地域・民族構成の傾向についてある程度量の揃った史料が存在するのはミ・ラ艦隊、特にミセヌム艦隊のみであり、属州艦隊に関してはデータがあまりにも少なく間接的な推論しか建てられない。しかし入隊者をローマ市民権保有者のみに限定していた軍団や帝国全土から比較的均等に兵士を募っていた補助軍とは違い、少なくともミ・ラ艦隊の入隊者には明らかに特定地域へ偏りが見られ、この現象について考察することは属州艦隊兵士の出身についても検証材料となり得る²⁰。

(一)、存在する史料。

艦隊兵士の出身地域に関する史料としては文献史料と墓碑・退役証書²¹といった碑文史料が挙

げられる。これらはそのほとんどがイタリアの両艦隊に関連するものであり、属州艦隊に関してはほんの一握りの史料しかない。この問題点を踏まえて上でまずは文献史料における艦隊兵士の出身地域の言及を見たい。しかしこちらもその量は乏しく管見ではタキトゥスによる二つの言及しか存在しない。

属州艦隊については上述した後六九年のバタウィア人反乱の際ゲルマニア艦隊の漕手にバタウィア人が複数含まれており、そのためバタウィア人反乱軍との戦闘中にゲルマニア艦隊から離反者・造反者が続出したという記述がある²²。

ミ・ラ艦隊については、「四皇帝の年」の内乱中にラウエンナ艦隊長官ルキリウス・バッスス Lucilius Bassus が、自艦隊兵士にパンノニア、ダルマティア出身者が多いことを鑑みてウィテリウス帝を裏切り同地を確保したウェスパシアヌスに寝返ったという記述が存在する²³。

文献から得られる情報はこれだけだがこれらの真偽を碑文史料を用いて検証することは可能だろうか。出身地域を特定できる碑文のほぼ全てはイタリアのミ・ラ艦隊のものであり、属州艦隊についてはなんらかの結論を導くにはデータが不足している²⁴。イタリアの両艦隊については、レッドによれば兵士の出身地を判別できる碑文の総計は後一～三世紀を通して二八八個（ミセム艦隊二三四個、ラウエンナ艦隊五四個）である。以下がその内訳となる。

表一 碑文史料から見るミ・ラ艦隊兵士の出身地と総数。Michel Reddé, <i>Mare nostrum</i> , p. 532 を元に作成。						
出身地	ミセム艦隊			ラウエンナ艦隊		
	兵卒	下士官級	士官級	兵卒	下士官級	士官級
アジア	二八名	一〇名	二名	三名		
シリア	七名	六名		五名	二名	
エジプト	四四名	一〇名		五名	二名	
アフリカ	八名	三名		一名	一名	
トラキア	三六名	一名	一名	二名		
ギリシア	七名	一名		一名		
ダルマティア	一名	一名	二名	九名	三名	二名
パンノニア	六名	四名	一名	四名	一名	
イタリア	三名	三名	四名	一名	四名	
コルシカ	六名			二名	一名	
サルデーニャ	二四名	三名		六名		
その他	四名			一名		
総計	二三四名			五四名		

表二 碑文史料におけるミセヌム艦隊の兵士の出身地の割合。Michel Reddé, "Les Marins," p. 187 を元に作成。

アジア	一七%
シリア	五%
エジプト	二三%
アフリカ	四・七%
トラキア	一六%
ギリシア	三・四%
ダルマティア	五%
パンノニア	四・七%
イタリア	四%
コルシカ	一・七%
サルデーニャ	一一・五%
その他	一・七%

ミセヌム艦隊兵士の出身地の内最も多いのは二三%のエジプトであり、一七%のアジア、一六%のトラキア、一一・五%のサルデーニャと続き、上位四地域が全体の六七・五%と全体の七割近くを占めている。

ラウエンナ艦隊については五四名中一九名つまり三五%がパンノニア、ダルマティアの出身でありタキトゥスの記述と合致している。ただし、その現存史料数がミセヌム艦隊と比べて四分の一以下であるという点には留意すべきだろう。

以上を見てわかるように、両艦隊とも兵士の出身地には明らかな偏りが存在する。以下でなぜこのような偏りが生じたのか、そしてこの偏りをそのまま属州艦隊の民族構成に当てはめることは可能であるかを検証する。

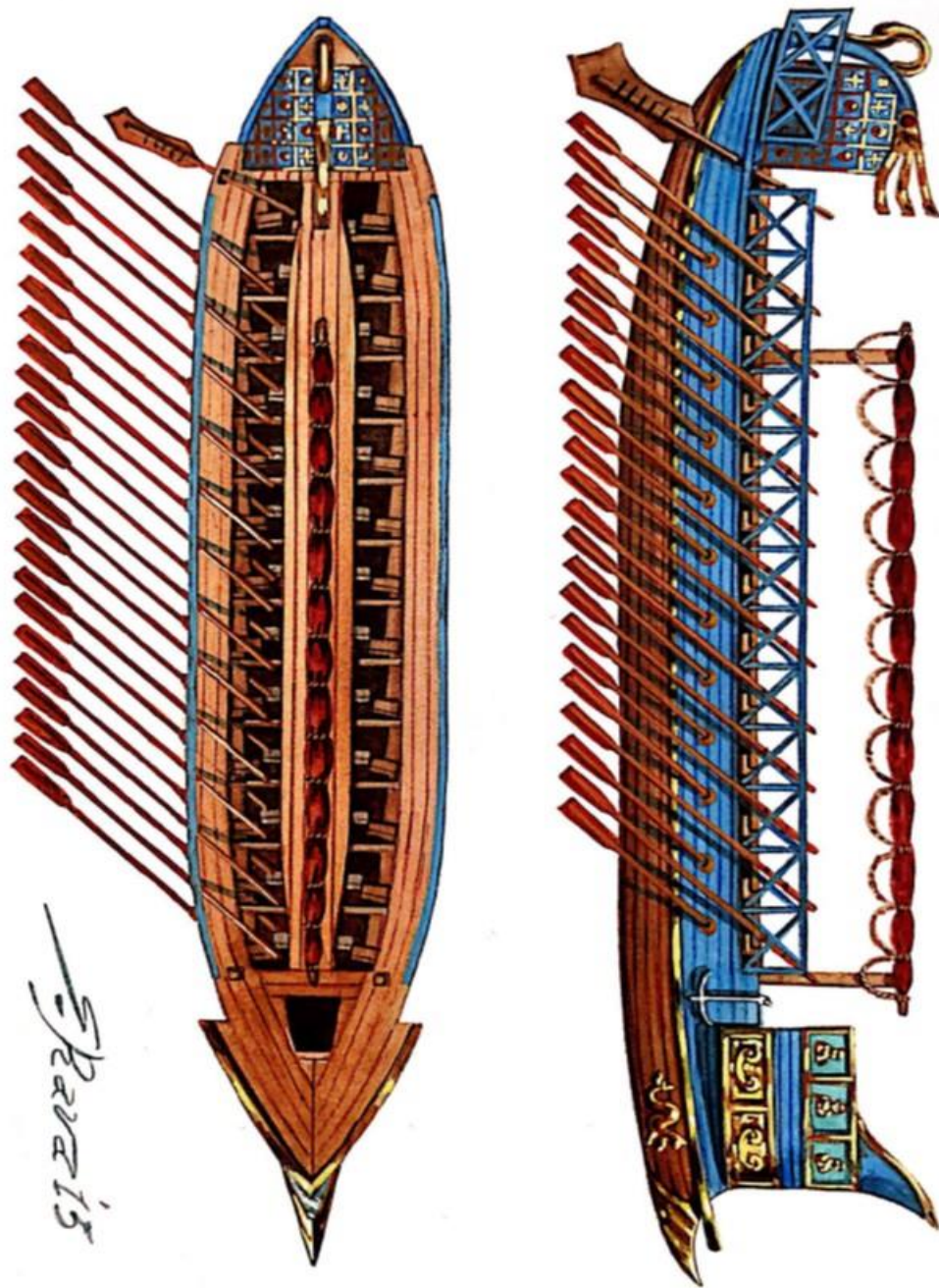


図 9 後二世紀の二段櫂リブルナの復元図。片舷に二五本、両舷合わせて五〇本の櫂を備えている。これを操作する漕手五〇名に他の水夫や重装歩兵を加えると乗組員数は七〇～八〇名ほどだったろう。上段の漕手が露出していることと、船体中央と舷縁にのみ甲板があることに注目。この設計はリブルナ艦を従来の設計よりも高速化させたが、同時に防御力も減少することとなった。このような防御力よりも高速を優先させた艦艇が主力となったことは、帝政期のローマ海軍の主敵が海賊などの用いる小型艦艇となったことを示唆している。D'Amato, *Imperial Roman Warships* p. 33 より。

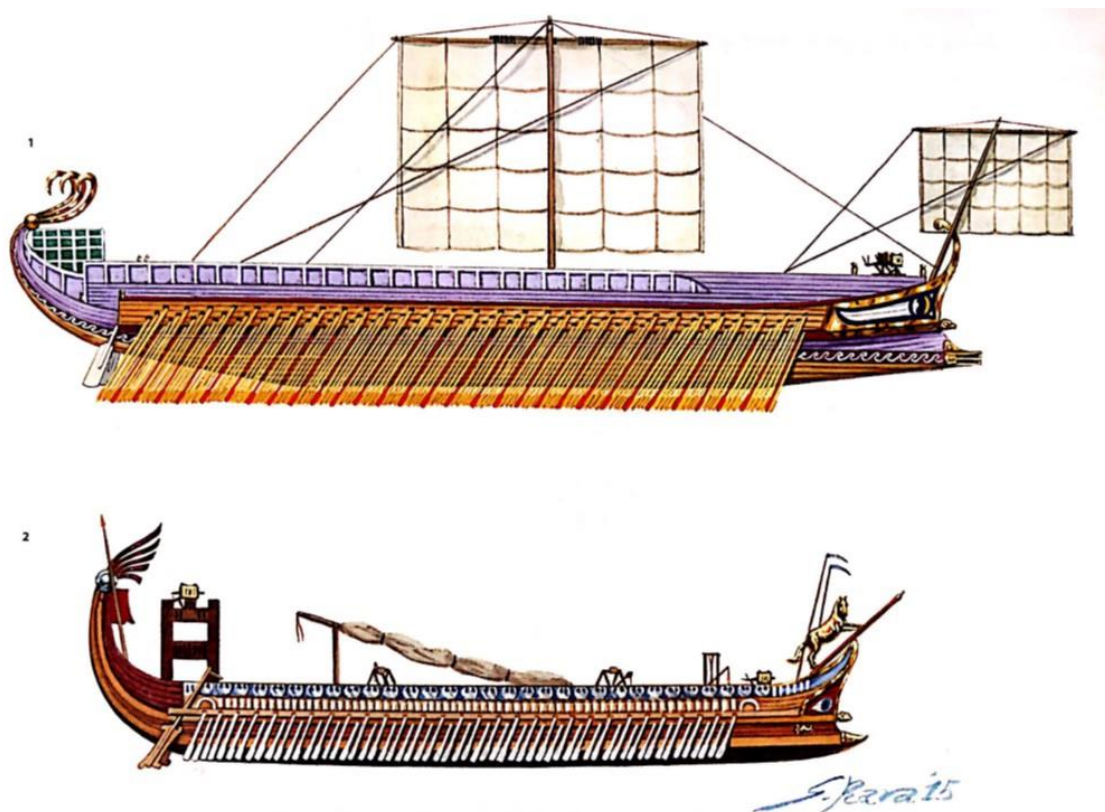


図 10 上段が五段櫂船、下段が四段櫂船の復元図。五段、四段櫂船といっても実際に設置できる櫂の段数は三段が限界であり、「段」という翻訳には問題がある。例えば三段櫂船の原語であるトリレミス (Triremis) は文字通り「三つの Tri 櫂 Remis」という意味であり、「段」を示す要素は存在しないのである。これらの数字が何を意味していたかということについては諸説あるが、一般的な見解では片舷の漕手の人数と関係していると考えられている。つまり、三段廻船は片舷三段の櫂にそれぞれ三人の漕手がいるので「三段」、四段櫂船は片舷二段の櫂にそれぞれ二人の漕手がおおり計四人の漕手なので「四段」、五段櫂船は片舷三段の櫂に上段二人、中段二人、下段一人で計五人の漕手なので「五段」、といった具合である。ポエニ戦争やローマ内戦では広く用いられたこれらの大型艦も、組織的な海軍を持った敵国が消滅した帝政期にはその数が大幅に減少することとなった。D'Amato, *Imperial Roman Warships* p. 30 より。



図 11 後 1~2 世紀の海軍兵士マルクス・ユリウス・サビニアヌス **Marcus Iulius Sabinianus** の墓碑。アテナイ出土。サビニアヌスはトラキアのベッシ族の出身で、ミセヌム艦隊に二五歳で入隊し、五年後軍役中に 30 歳で死亡した。彼が描かれたレリーフでは右手に槍を、左手には円盾を携えており、左腰にはナイフのプギオ **Pugio** を、右腰には短剣グラディウス **Gladius** を挿している。衣服は兵士が好んで身につけた外套パエヌラと、兵士の象徴である鉾を打った革紐を垂らした帯バルテウス **Balteus** を身に着けており、これらの意匠から彼の自身の兵士としての身分を誇示したいという意思が伺える。Raffaele D'amato, *Imperial Roman Naval Forces 31 BC-AD 500*, (Oxford; Osprey Publishing, 2009), p.7 より。

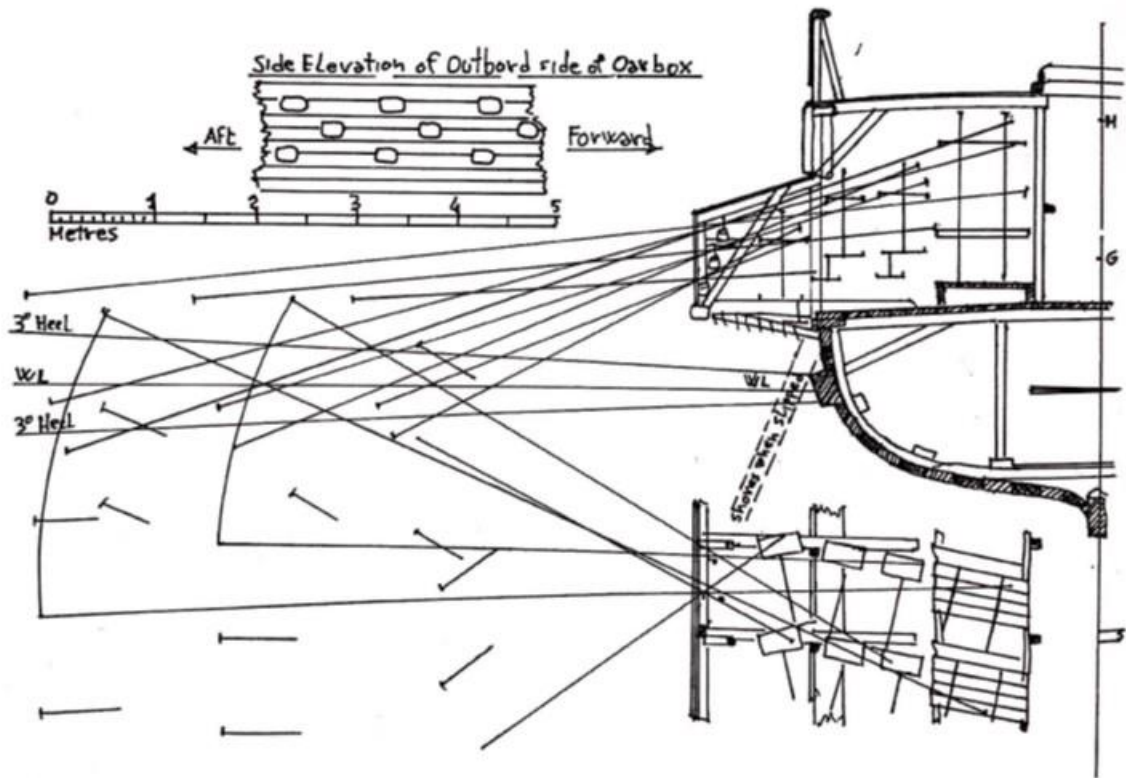


図 12 五段櫂船の櫂配置の想定図。この設計では、最上部の漕手は立ったまま漕ぐことになる。三段櫂船以上の軍艦の櫂の配置については、現物の軍艦が発見されていないため明確な答えは出していない。D'Amato, *Imperial Roman Warships* p. 30 より。

(二)、ミ・ラ艦隊兵士の出身地域・民族の偏り

考察対象が「艦隊」である以上その出身構成の偏りの原因に関して最初に考えつくのが当該地域・民族の海事の伝統の有無であろう。言うまでもなくミセヌム艦隊で出身者が最多のエジプトは、ナイル川と東地中海において船舶を交易や戦争に広く用いておりローマ期のはるか以前から強い海事の伝統を有してきた。

ミセヌム艦隊第二位のアジアもその内訳を見るとほぼ半数がアナトリア半島東南部沿岸のギリキア出身である。ギリキアは共和制期においては海賊行為で悪名高かった地域であり、ここもまた海事の伝統が強かったと思われる²⁵。

しかしながらこの偏りを単なる海事の伝統の有無に起因させることはできない。ミセヌム艦隊第三位のトラキアも黒海やエーゲ海に面した沿岸地域があり海上活動がなかったわけではない。しかしミセヌム艦隊のトラキア人兵士の内八割以上は内陸部の山岳地帯と平野部に居住地域を持ち、航海技術ではなく乗馬技術で知られたベッシ族の出身だったのである²⁶。また第四位のサルデーニャも海上活動が盛んだった地域ではあるが、その近隣のコルシカ島の出身者はわずか一・七%である。古典期以来の海事の伝統を持つギリシア出身の兵士も三・四%しかいない。こ

の点から見て艦隊兵士の出身地域には海上活動の有無以外の要因があったのは明白である。更にラウエンナ艦隊においてミセヌム艦隊で多数存在したトラキア出身者がほとんど見られないことは兵士の出身の偏りには艦隊ごとに異なる要因が存在したことを示唆している。ではこの要因とはなんだったのか。

考えられるのが地理的な距離である。単純に考えて各艦隊から近い地域ほど入隊後の配属が容易になるからである。実際ラウエンナ艦隊の本拠地であるラウエンナと、ラウエンナ艦隊で最も出身者の多いパンノニア、ダルマティアはアドリア海を隔てた近い位置にありこの地域出身の新兵がラウエンナへ移動するのは容易だったろう。しかしながら、ミセヌム艦隊に遠方のトラキア、アジア、エジプトの出身者が多数いたことを考えるとこれが要因だとは考えにくい。これらに加えてサルデーニャ、コルシカ、アフリカを除いた地中海西部の属州、つまりブリタニア、ガリア、ヒスパニア、ゲルマニアの出身者が、これらの属州が補助軍には大量の兵員を提供していたにも関わらず、いずれの艦隊においても全く見られないことは注目に値するだろう。

この問題に関して近年スティーブン・タック (Steven L. Tuck) は、艦隊兵士を多く輩出している地域の大半がローマ帝国において経済的発展と都市化が遅れていたことを指摘し、経済的要因を重視している²⁷。しかしそれだけではエジプト出身の艦隊兵士が最多数であることと、同じく相対的に経済が未発達だった帝国西部出身者がほぼ見当たらないことの説明がつかない。いずれにせよ現時点ではこれ以上の検証は難しいと言わざるを得ない。



図 13 ヘルクラネウムから出土した釣り船。この船は軍用ではないが、この時代の船の基本構造は船殻を先に作り、そこに枠組みを釘やほぞ接ぎで組み込むというもので、その点では軍艦も同様だったと想定されている。Padiglione della Barca Romana 所蔵。筆者撮影。

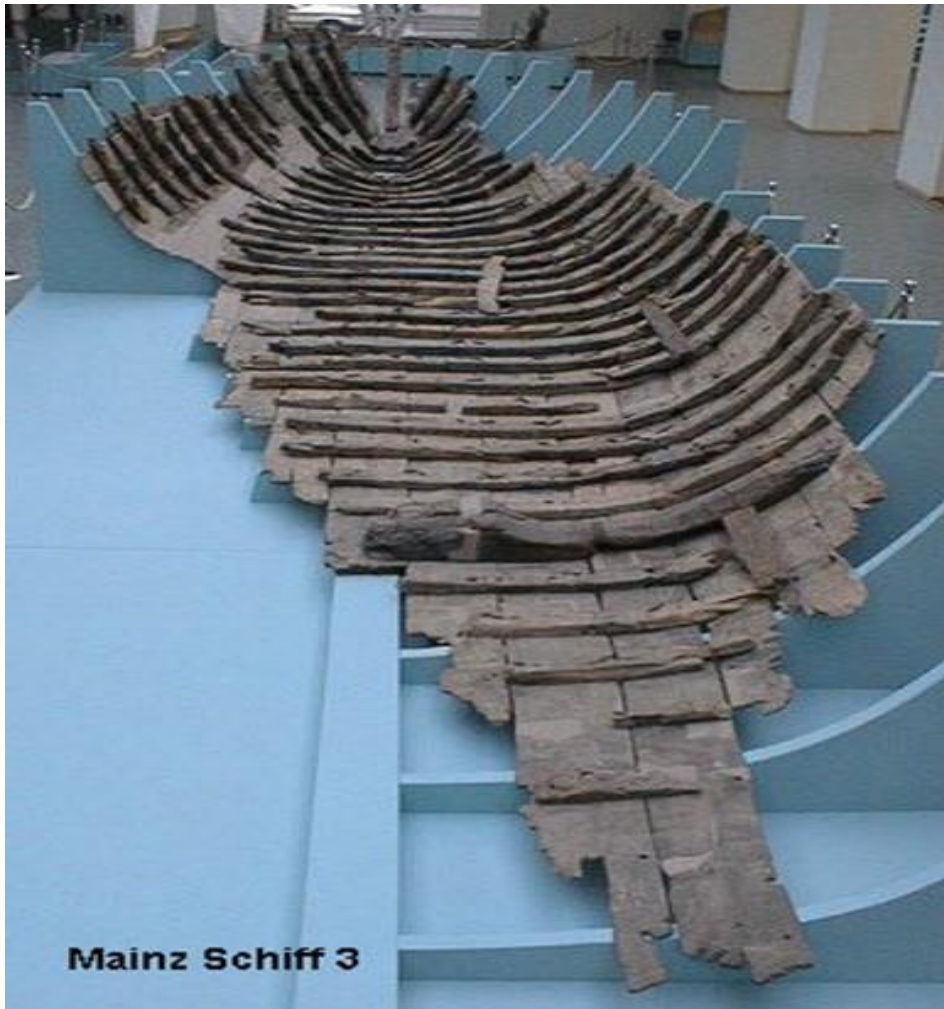


図 14 ドイツ、マインツで発見された後四世紀頃の哨戒艇ナウイス・ルソリア Navis Lusoria で、Mainz Schiff 3 と呼ばれている。現在は同市の Museum für Antike Schifffahrt にて保存されている。Barbara Pferdehirt, “Das Schiff Mainz 3,” Römisch-Germanisches Zentralmuseum <https://www2.rgzm.de/Navis/Ships/Ship033/Image/033f4001.jpg> (Retrieved 2018/10/02)

(三)、属州艦隊の民族構成

次に属州艦隊における民族構成の考察を行いたい。上述したように属州艦隊に関して直接兵士の出身に言及する史料は極めて少ない。ここで問題としたいのはミ・ラ艦隊における出身地の傾向をどの程度属州艦隊に当てはめられるのかということである。上述した『同時代史』におけるゲルマニア艦隊のバタウィア人の漕手の例が正しければ、少なくとも後一世紀半ばのゲルマニア艦隊においては現地出身者が多数所属していた。だがこの一例をもって元首政期を通じてのゲルマニア艦隊、ひいては属州艦隊全体の民族構成を論じることは出来ないだろう。一方で属州艦隊において現地出身者以外の兵士が所属していたことを示す事例証拠としては碑文の発見場所か

らゲルマニア艦隊所属と思われるプロレタ *Proreta*（見張員）でエジプトのアレクサンドリア出身のホルス（*Horus*）²⁸やブリタニア艦隊所属の艦隊兵士でトラキア出身のディディオ（*Didio*）²⁹の例などがあるがこれも判断を下すには数が少なすぎる。

ここで考慮したいのがイタリア両艦隊と属州艦隊の間の人員の交換の有無である。もしも両者間で人員の移動が恒常的に行われていたとすればイタリア両艦隊の民族構成がある程度は属州艦隊にも“移植”されていたはずである。これを証明する直接的な証拠はないがそれを示唆する史料は存在する。

まずミ・ラ艦隊はイタリア内に貼り付けられていたわけではなく恒常的に分遣隊を各地に派遣していた。これらの分遣隊はエーゲ海³⁰、小アジア³¹、シリア³²、クリミア半島³³などにおいて存在が確認されている。スエトニウスとウェゲティウスによればミセヌム艦隊は地中海西部を、ラウエンナ艦隊は地中海東部を活動区域としていた³⁴。しかしこれは碑文史料から見える実態からは明らかに反している。例えばウェゲティウスに従うならばシリアはラウエンナ艦隊が担当していた筈だが、同属州のセレウキア・ピエリア港（*Seleucia Pieria*）においてはラウエンナ艦隊のみならずミセヌム艦隊の分遣隊が配属されていたことは墓碑碑文とパピルス文書によって明らかである。実際、セレウキア・ピエリアから出土した艦隊兵士の碑文は、ミセヌム艦隊の兵士のものがラウエンナ艦隊のみならず同地を本拠地としていたとされるシリア艦隊の兵士よりも五倍以上多い³⁵。スエトニウスとウェゲティウスが提唱する活動区域の区分が実態を伴っていたとしてもそれは両艦隊の創設期であるアウグストゥス期のみの出来事だろう。これらの分遣隊が具体的にどのような任務に従事していたかは史料が乏しく不明瞭ではあるがいずれにせよイタリアの両艦隊が地中海、そしておそらくは黒海においても活動していたことは確かである。

こうした分遣隊が属州艦隊とどのような関係を持っていたのかについては、これらの部隊が共同して任務にあたっていたことを示す史料が一つ存在する³⁶。これは北アフリカのチュニジア、マクタルで出土したもので、騎士階級の人士ウァレリウス・マクシミアヌス（*M. Valerius Maximianus*）のキャリアが記されている。そこでは彼がマルコマンニ戦争（後一六二～一八〇年）においてマルクス・アウレリウス帝にドナウ川を経由してパンノニアのローマ軍に物資を補給することを命じられ、そのための輸送船団・それを護衛するアフリカ人騎兵部隊そしてミセヌム、ラウエンナ、ブリタニア艦隊の分遣隊からなる小艦隊を指揮したことが記されている。

ミ・ラ艦隊と属州艦隊が共同して作戦にあたったことを示す具体例はこれのみではあるが少なくともこうしたことが起こり得たこと自体は間違いない。またミ・ラ艦隊の分遣隊はセレウキア・ピエリアの例のように軍港を使用する関係上頻りに属州艦隊と接触を持っていたはずである。そうだとすれば、ローマ軍全体において部門間の異動が恒常的に行われていたということを考慮しても両者間で人員の移動が発生していた可能性はある³⁷。

ここで上述したミ・ラ艦隊において帝国西部の出身者がほぼ見られないという現象に着目したい。この原因の一つには帝国西部の人間が属州艦隊に吸収されていたことがあるのではないか。タキトゥスのゲルマニアからのバタウィア人漕手の存在に関する言及が一般的な状況を表していたという仮定に基づく形にはなるが帝国西部の属州艦隊（ブリタニア艦隊・ゲルマニア艦隊）が現地民を恒常的に運用していたならば、この二つの艦隊の民族構成がミ・ラ艦隊のそれをベースに、現地出身者の割合を多くしたものだった可能性はある。

三、 結論

以上、元首政期のイタリア両艦隊と属州艦隊の差異をその組織構造と兵員の地域的・民族的構成という二つの点から検証した。

組織面においては同じ「ローマ海軍」といえどミ・ラ艦隊と属州艦隊は明確な差異があったと言えるだろう。属州艦隊はその長官の格や規模からいって明らかにミ・ラ艦隊よりも見劣りするものであり同列には並べられない。ミ・ラ艦隊兵士の入隊時の市民権授与については、明確な証拠がなく判断を下すのは難しいが事実だとすればこれも属州艦隊との明確な差異となっただろう。

兵員の出身に関しては、ミ・ラ艦隊ではエジプトやトラキアといった特定地域の偏りが認められる。その原因については単なる海事的伝統や地域の経済的発展の度合いでは説明できず明確な原因は定かではない。属州艦隊については関連する情報が極めて乏しく、仮説を立てることすら困難ではある。しかしミ・ラ艦隊が地中海において活発に活動していたことを踏まえるとミ・ラ艦隊の人員がある程度属州艦隊にも異動されていた可能性はある。

ではこれらの結論からなにが言えるのか。もしスエトニウスとウェゲティウスのミ・ラ艦隊の担当区域に関する言及がアウグストゥス期の実態を反映しているとするれば属州艦隊はミ・ラ艦隊の指揮系統に隷属していた可能性がある。日常的な任務において属州艦隊がミ・ラ艦隊の指示を仰いでいたとは考えにくいだが、両者が共同で行動した場合はお互いの艦隊長官の格差を考慮しても優先権はミ・ラ艦隊にあった筈である。換言すればミ・ラ艦隊と属州艦隊には軍団と補助軍の間に存在したのと似た性質の序列が存在したのである。

¹ ゲイル・エドワード、「(研究動向) 元首政期ローマ海軍について」(『軍事史学』五十四巻二号、二〇一八年九月) 一一九～四二頁。

² 四八〇人編制の第一〇～第二大隊、八〇〇人編制の第一大隊、一二〇人の騎兵で計五、二四〇人となる。Kate Giliver, "The Augustan Reform and the Imperial Army," in Paul Erdkamp (ed.), *A Companion to the Roman Army* (Malden, MA; Oxford; Carlton, VIC: Blackwell, 2007), pp. 189-190 を参照。

³ Tac. *Hist.* 2.12-15. 邦訳については、タキトゥス『同時代史』國原吉之助訳(筑摩書房、一九九六年)七二～七四頁参照。

⁴ 元首政期の艦船名はどの艦隊であろうと神名、望ましい価値を意味する名詞や形容詞、武具といった命名規則が用いられていたようである。ただし艦船名を誰が決定していたのかについては史料が全く存在しない。ミセヌム艦隊とラウエンナ艦隊の艦船数と艦船名は Michel Reddé, *Mare nostrum. Les infrastructures, le dispositif et l'histoire de la marine militaire sous l'Empire romain* (Paris; Roma: École française de Rome, 1986), pp. 665-669 を参照。艦船名の命名規則については Steven L. Tuck, "An Instrument of Imperial Ideology? Names of Ships in the Roman Fleet," *Ancient History Bulletin*, 20.1-4, (2006), pp. 83-95 を参照。

⁵ 三段櫂船以上の艦艇はイタリア両艦隊のものを合計しても六段櫂船が一隻、五段櫂船が三隻、四段櫂船が一六隻に過ぎない。リブルナ艦 *Liburna* とはもともとバルカン半島アドリア海東岸に居住していたリブルニア人が海賊行為に用いていた小型の快速船を指すが、元首政期には小型の軍艦全般を指す呼称となっていた。既存の二段櫂船などと比べ、甲板が舷縁と船体中央部のみに設けられていた点と、上段部の漕手が甲板上に上半身を晒している点が最大の違いである。この構造の利点としては船体の軽量化と高速化があるが、上段部の漕手が戦闘時には被弾しやすいという欠点もある。このためか、舷縁に複数の盾を設置しているリブルナ艦の図像も

存在している。リブルナ艦の概要については Olaf Höckmann, "The Liburnian: some observations and insights," *The International Journal of Nautical Archaeology* 26-3 (1997), pp. 192-216 を参照。

⁶ Jos. *BJ.* 2. 366-67. 邦訳については、ヨセフス『ユダヤ戦記』新見宏・秦剛平・中村克孝訳（山本書店、一九八一年）三二頁参照。

⁷ Everett L. Wheeler, "Roman fleets in the Black Sea: mysteries of the *classis Pontica*," *Acta Classica* 55 (2012), pp. 131-141. ウィーラーの結論では三、〇〇〇人の重装歩兵はポントス艦隊ではなく軍団から派遣された分遣隊の兵士を指している。

⁸ Tac. *Hist.* 4. 16. タキトゥス『同時代史』二〇七頁。

⁹ Jorit Wintjes, "Sea Power without a Navy? Roman Naval Forces in the Principate," in Marcus O. Jones (ed.), *New Interpretations in Naval History: Selected Papers from the Seventeenth McMullen Naval History Symposium Held at the United States Naval Academy 15-16 September 2011* (Newport, RI: Naval War College Press, 2015) pp. 15-16.

¹⁰ Suet. *Aug.* 16. 邦訳についてはスエトニウス『ローマ皇帝伝 上』国原吉之助訳（岩波書店、一九八六年）一〇七頁参照。

¹¹ Tac. *Ann.* 14.3. 邦訳についてはタキトゥス『年代記 下』国原吉之助訳（岩波書店、一九八一年）一七四頁を参照。

¹² 一連の議論に関しては Michel Reddé, *Mare nostrum*, pp. 474-486 を参照。

¹³ 三氏名の概要と発展については Benet Salway, "What's in a Name? A Survey of Roman Onomastic Practice from c. 700 B.C. to A.D. 700," *The Journal of Roman Studies* 84 (1994), pp. 124-130 を参照。

¹⁴ Suet. *Claud.* 25. スエトニウス『ローマ皇帝伝 下』国原吉之助訳（岩波書店、一九八六年）一一〇頁を参照。

¹⁵ *BGU*, II, 423.

¹⁶ J. C. Mann, "Name Forms of Recipients of Diplomas," *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 139 (2002), pp. 232-234 を参照。

¹⁷ J. C. Mann, *Ibid.*; Julian Bennett, "Becoming a Roman; Anatolians in the Imperial Roman Navy," *ADALYA* 20 (2017), p. 218.

¹⁸ Lloyd Hopkins, "Fleets and Manpower on Land and Sea: the Italian Classes and the Roman Empire 31BC-AD193," PhD. (Oxford University Research Archive, 2014), pp. 52-55

¹⁹ Michel Reddé, "Les Marins," in G. Alföldy, B. Dobson, W. Eck (eds.), *Kaiser, Heer und Gesellschaft in der römischen Kaiserzeit, Gedenkschrift für Eric Birley* (Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2000), p. 179.

²⁰ 艦隊の民族構成に関する研究は、近年の元首政期ローマ海軍の研究における主眼となっている。例としては Ionuț Acrușoae, "Militaries from Pannonia in the Imperial Fleet at Misenum and Ravenna (first-third centuries AD). Prosopographical aspects," *Studia Antiqua et Archaeologica* 18 (2012), pp. 127-160; Tønnes Bekker-Nielsen, "Thracians in the Roman Imperial Navy," *The International Journal of Maritime History* 29-3 (2017), pp. 479-494. Julian Bennett, "Becoming a Roman; Anatolians in the Imperial Roman Navy," *ADALYA* 20 (2017), pp. 213-240; Dino Demicheli, "Dalmatians in the Roman Imperial Fleet," in L. Vagalinski, N. Sharankov (eds.), *Proceedings of the 22nd International Congress of Roman Frontier Studies, Ruse, Bulgaria, September 2012* (Sofia: National Archaeological Institute with Museum with Bulgarian Academy of Sciences, 2015), pp. 391-398; Danijel Džino, "Aspects of Identity-Construction and Cultural Mimicry among Dalmatian Sailors in the Roman Navy," *Antichthon* 44 (2010), pp. 96-110.

²¹ ディプロマタ (Diplomata) は市民権を保有しないローマ兵が任期満了で退役した際に発給された青銅製の退役証書であり、ローマ市に保管されていた本文の写しである。内容はおおむね定型化されており、発給時の皇帝の氏名と称号・対象となる部隊の名称・補助軍ならばその部隊が配属されている属州と総督の名前・発給月日・兵士自身の姓名・証人となる七名の兵士の姓名が記され、その兵士が軍役を満了したこと・ローマ市民権を与えられること・婚姻権を認める旨が述べられる形となっている。Lesley Adkins and Roy A. Adkins, *Handbook to Life in Ancient Rome* (New York; Oxford: Oxford UP), p. 236 を参照。

²² Tac. *Hist.* 4. 16. タキトゥス『年代記』二〇七頁。

²³ Tac. *Hist.* 3. 12. タキトゥス『年代記』一三九～一四〇頁。

-
- ²⁴ 例えばモエシア艦隊については出身地はおろか名前を特定できる艦隊兵士自体が一四名に過ぎない。これらについては Florian Matei-Popescu, *The Roman Army in Moesia Inferior* (Bucharest: Conphys Publishing House, 2010), pp. 249-255 を参照。
- ²⁵ Julian Bennett, "Becoming a Roman," pp. 221-222.
- ²⁶ Tønnes Bekker-Nielsen, "Thracians in the Roman Imperial Navy," *The International Journal of Maritime History* 29-3 (2017), p. 482-483. なおこちらの数値はタック (Steven L. Tuck) の近年の調査によるもので、ここではトラキア出身のミ・ラ艦隊兵士がレッデの調査における四〇名から五二名に増加している。タックの表は Steven L. Tuck, "Nasty, Brutish and Short? The Demography of the Roman Imperial Navy," in John Bodel and Adele Scafuro (eds.), *Ancient Documents and their Contexts: First North American Congress of Greek and Latin Epigraphy (2011): Brill Studies in Greek and Roman Epigraphy Volume 5* (Leiden; Boston: Brill, 2015), pp. 215-216 を参照。
- ²⁷ Steven L. Tuck, "Nasty, Brutish and Short?," pp. 217-218.
- ²⁸ *CIL*, XIII, 8322.
- ²⁹ *CIL*, XIII, 3544.
- ³⁰ ラウエンナ艦隊のもの。サモス島出土。 *CIL*, III, 322.
- ³¹ ミセヌム艦隊のもの。エフェソス出土。 *AE*, 1972. 582 = *AE*, 1974. 621.
- ³² Julian Bennett, "Becoming a Roman," p. 216.
- ³³ *CIL*, III, 14214。ただし、この碑文はラウエンナ艦隊ではなくモエシア艦隊のものである可能性がある。この議論については Octavian Bounegru and Mihail Zahariade, *Les Forces Navales du Bas Danube et de la Mer Noire aux Ier-VIe siècles* (Oxford: Oxbow Books, 1996), p. 31 を参照。
- ³⁴ Suet. *Aug.* 49.; Veg. *Mil.* 4.31. スエトニウス『ローマ皇帝伝 上』一四七頁。ウェゲティウスは未邦訳。
- ³⁵ Jorit Wintjes, "Sea Power without a Navy?," n. 34; Julian Bennett, "Becoming a Roman," n. 29 を参照。
- ³⁶ *AE*, 1956, 124.
- ³⁷ 部門間の異動についてはゲイル・エドワード、「(研究動向) 元首政期ローマ海軍について」一三八頁を参照。